

第8回「オリアム随筆賞」

【優秀賞】

最後の一着

遠藤和代・香川県

令和元年を迎えた五月、わたしは七十歳になった。まだまだ若いつもりだったが、急に人生の終焉が射程距離に入って来たようで、何となく心がざわつく。

世の中は断捨離ブームだというのに、わたしの荷物は増えるばかりだ。ブームにのっかりわたしもそろそろ身軽になって、人生を謳歌するのも悪くない。荷物が減れば、わたしがこの世を去った後、子供たちへの負担も少し軽くしてあげられる。

そんな思いを夫に告げると、

「死んだら何も分からんで。後のことなんか考えてもなるようにしかならん。でもまあ、あんたの古着だけは、始末しといたほうがいいかもしれない」

最後にひと言、わたしへの批判をするのは、いつものとおりだ。

夫に相談なんかしなければよかった、と心の中で毒づきながらも、洋服ダンスや押し入れの中を点検した。何年も開けたことがない衣装ケースの蓋を開けると、思い出が詰まった服が次々出て来て、しばらく前に進めない。頭の中で、思い出がメリーゴーランドのように回る。

自分のスタイルが悪くて、既製服を買うのに苦労していた母は、五十を過ぎて洋裁学校へ行った。そのころ縫ってくれたえんじ色のワンピースが出てきた。当時、外国航路の船員をしていた夫に会いに行くために縫ってくれたものだ。似合っているよ、という夫の言葉を期待していたのに、男ばかりの船には、ふさわしくない服だと窘められた。がっかりしたわたしはPTA参観に着て行ってみた。

小学生だった長女が、お母さんの服とってもきれい、と友だちが言っていたよ、と報告してくれた。

せっかく洋裁学校へ行った母だが、わが家の女三人の衣装作りに追われて、自分の服どころではない。そう嘆きながらも、母は着てもらえるのが嬉しかったのか、流行の服を次々縫ってくれた。パンタロンスーツや襟が高くて体にびったりのシャツ、子供たちのジャンパースカート、通学用の袋など沢山縫ってわが家の家計を助けてくれた。わたしの服も夫好みの茶色や紺色などに変えてくれた。

引越越しするときに捨てたのか、母が縫ってくれた服で残っているのは、えんじ色のワンピースだけになっていた。他の服は写真ブックに残っているからいいか。

このワンピースだけが、どうして残ったのか。ジョーゼットの高価な生地だったのと、わたし好みの色だったからに違いない。縫ってくれた母は、十年前に他界したが、ワンピース

の色はいまも褪せてなくて、手を通したくなるほどだ。太ってしまった体にはもう無理だ。ど。洋裁学校の先生から買ったが、縫いにくくて難儀する、と母はぼやきながら、仮縫いをしてくれた。ときどきあたる母の手は暖かかった。

母さん、あなたが縫ってくれた服はもうこれ一着になってしまったけれど、捨ててもいいかな。

一着広げること過ぎて行った時間を手繰り寄せていたのでは、なかなか前に進まない。古着で足の踏み場もない部屋の中で、立ち往生していると、夫が覗きに来た。

「思い切って捨てな、きりがないで」

コーヒーとともに嫌味も置いて出て行った。

わたしの人生を飾ってくれた服たちに、さようならをするにはそれなりの儀式がいる。留守家族をまもって一生懸命生きた証なのに、夫には理解してもらえない。

古着の整理は三日あまりかかった。再利用できそうな服を残して、ゴミ袋に詰めていく。えんじ色のワンピースも思い切って詰め込んだ。五箱あった衣装ケースは二箱になった。やっとな捨てる決心ができて、ホッとしていたら、ゴミ袋を取りに来た夫に、「これだけ」と不満そうに言われた。

最後の夜は、疲れきった。いつもより一時間早くベッドに入ったが、二時間後には目覚めてしまった。何とかして寝付こうと、右に左に寝返りを打ってみたが、やはり眠れない。

明け方、ついにええい、と起き出した。隣室で寝ている夫を起こさないように、そうと階下へ下りて行く。車庫の中に積み上がっているゴミ袋の中から、えんじ色のワンピースを取り出す。かなり底になっていたが、何とか取り出せた。朝の早い夫に見付けられないように、ワンピースを抱えて寝室へ戻った。

ハンガーにつるしてわたしは考える。たぶんウエストを広げて、脇を少し出せば、まだ何とか着られるのではないか。少し派手かもしれないが、自分が恥ずかしくなければそれでいい。

そうだ、図書館にサイズ直しの本があったな。開館したらさっそく借りに行こう。

安心したわたしは、再びベッドに入って、今度はぐっすり眠った。